

古墳から  
奈良時代の  
窯跡



窯跡分布図



1

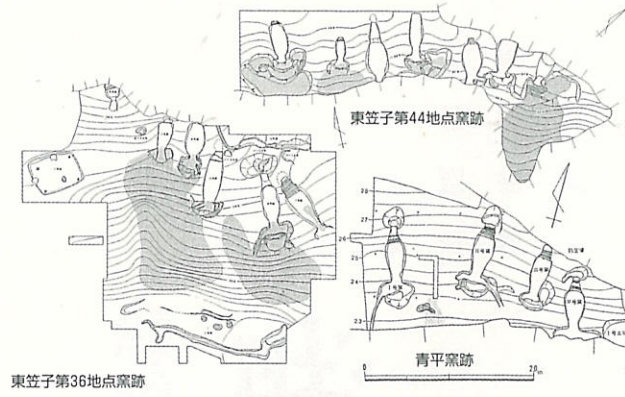


2



3

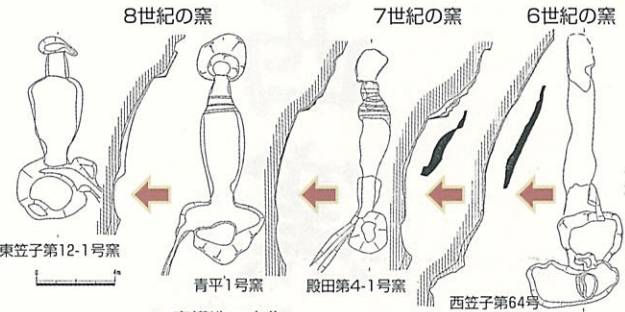
- ① 青平窯跡遠景 (8世紀)  
斜面に次々と窯を築き増産を行っていた。
- ② 谷上第2地点窯跡 (7~8世紀)  
湖西窯は全長6.7mほどで階段構造に特徴がある。窯の脇には平らな作業場を設け、斜面には灰や出来損ないの須恵器(スエキ)を捨てている。
- ③ 西笠子第64号窯跡 (6~7世紀)  
窯場は窯本体だけでなく作業場や小屋を設けている。



東笠子第36地点窯跡

奈良時代の窯場

湖西市には200ヶ所ほどの窯跡があり、1ヶ所3基以上の窯が築かれた。多い個所では10基を数えるので、湖西窯の総数は約千基ほどであろう。



窯構造の変化

窯は斜面に溝を掘り天井を架けて一室を設けるが、器を効率よく焼くためにさまざまな工夫や改良を加えている。6世紀にはトンネル状であったものが(最右端)、7世紀には階段を加え改良型を成立させた(右より2番目)。

古墳時代の須恵器



5世紀には湖西窯を築いている。焼かれた須恵器(スエキ)は古墳に埋納された。

奈良時代の須恵器



湖西窯製品は東日本の太平洋沿岸諸国に多く流通した。自然釉が緑色に美しく発色している。

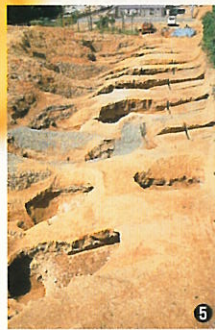
遙かな昔も、湖西は先進工業地帯だった。

平安末から  
鎌倉時代の  
窯跡



窯跡分布図

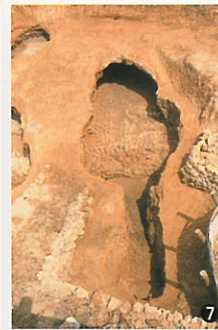
- ④ 山口第17地点窯跡遠景 (12世紀)  
窯は斜面に次々と窯跡を並べて増産を行った。
- ⑤ 新古窯跡全景 (12~13世紀)  
全長20mもの巨大窯が5基発見された。1m間隔で並ぶのは圧巻である。
- ⑥ 山口第17-1号窯 (12世紀)  
平安末頃の窯は全長13mで分楯柱がある。大甍から甍・碗・小皿の日常雑器全般を焼いている。床には置台が散乱している。
- ⑦ 新古1号窯 (13世紀)  
鎌倉時代の窯は全長20mと巨大化する。分楯柱から昇楯へ窯が改良され碗・皿を主に焼く。写真の窯は天井が良く残っている。
- ⑧ 東笠子第44-8号窯出土の大甍  
高温のため甍がひしゃげてしまいがち放棄されている。横6列縦10個以上の二段に甍を詰めていた。1基の窯で大量生産を行っていた。
- ⑨ 新古2号窯出土の碗皿  
碗皿を並べて窯詰した後にどういっわけか火入れを行っていない。碗皿はかるうじて形を残しているが、一部は粘土に戻っている。



5



6



7



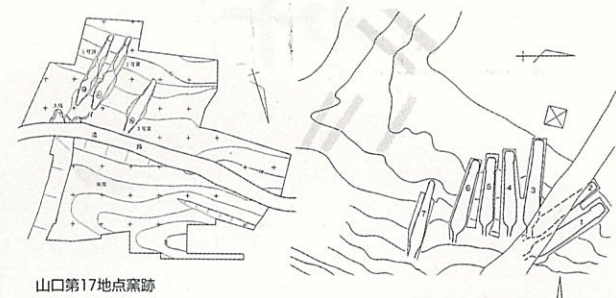
8



9



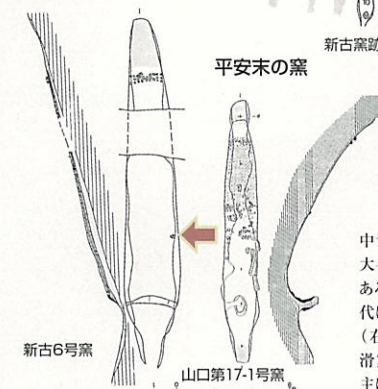
4



山口第17地点窯跡

宿北窯跡

鎌倉時代の窯



新古6号窯

山口第17-1号窯

平安末の窯

中世窯跡の窯場である。古代に比べ窯分布は少ないが、1ヶ所に数多くの窯が密集して生産を行っていた。まさに陶器生産工場である。

中世の窯は全長10m以上が大甍で20mにも達するものもある。分楯柱の窯は鎌倉時代に昇楯へ窯が改良された(右から左へ)。瀬戸窯・常滑窯との競争により碗・皿を主に焼くようになる。

山口第17地点窯跡出土瓦



湖西最古の瓦。焼かれた瓦は湖西市内ではなく、京都の仁和寺や平安宮に送られた。

平安末~鎌倉時代の  
中世陶器



甍・甍・すり鉢や碗・小皿、視から鉢までさまざまな日常雑器を焼いていた。